

放課後等デイサービスにおける 演劇アウトリーチ活動の実践とその効果

眞榮城 和 美
目 良 秋 子

問題と目的

地域自治体主催アウトリーチの動向

アウトリーチとは、「手を伸ばす」を語源としており、広義には「積極的対象者のいる場所に向向いて働きかけること」である。元来、福祉領域で用いられていた言葉であるが、1990年代後半頃から芸術活動におけるアウトリーチへの関心が高まり、地域自治体を中心として展開するケースが増加している。芸術活動におけるアウトリーチの発展に伴い、地域との回路づくりとしての芸術活動アウトリーチの在り方や、そのインパクトおよびポテンシャルについて検討した報告も蓄積されつつある（例えば、吉本, 2003；財団法人地域創造, 2010；吉本, 2013；津上, 2013）。

地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究（財団法人地域創造, 2001）では、芸術活動におけるアウトリーチを次の7つに分類している。

- ①アーティストを地域に派遣したり、作品を外部に持ち出して行う地域派遣型事業、②芸術を体験・創作する様々なスタイルのワークショップ事業、子どもや青少年、親子向けに特別に企画された普及事業、③専門家やアーティストの解説付き芸術鑑賞事業、④教育普及を主目的とした展覧会事業、⑤実技指導や専門家育成を行う事業、⑥芸術の専門的知識を学ぶ教養型セミナー・講演事業、⑦日ごろ見られない施設の裏側や文化施設そのものを見

学・体験する施設体験型事業。このように、芸術活動におけるアウトリーチでは、作品の展示や鑑賞のみならず、教育普及（エデュケーション事業）を目的として展開している側面も持ち合わせている。特に、教育普及活動としてのアウトリーチにおいては、受け手側だけでなく提供者側への実践効果が及ぶことをねらいとしている点もあることから、前述7分類のみならず、新たな分類に位置づけられるアウトリーチ活動も存在するものと考えられる。

せんがわ劇場の概要とエデュケーション事業

調布市せんがわ劇場は、小規模・ホール単体施設である特徴を活かし、舞台芸術に特化し、その創造拠点として、調布市・仙川地域における新たな地域文化の創出に寄与し、舞台芸術面での仙川・調布市というまちのブランド力を高める発信基地となっている（せんがわ劇場，2021）。2008年4月に開館して以降、2018年度までは調布市の直営による運営がなされ、2019年度に指定管理者制度を導入し、現在は公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団が管理運営を担っている。

せんがわ劇場のエデュケーション事業では、調布市に位置する白百合女子大学との共同研究・プログラム開発を展開し、継続的に実施している。具体的には、次の2点の目標を掲げて活動してきた：①ブルックリン・アカデミー・オブ・ミュージック（Brooklyn Academy of Music: BAM）の協力による企画の展開・継続実施（2019年まで）。②劇場事業を企画運営する「演劇アウトリーチグループ：DEL（Drama Education Lab）」を構成し、幅広い年代を対象とする表現ワークショップ・コミュニケーションワークショップの展開^{脚注1}、育成プログラムの充実化、複数専門家による、劇場運営の仕組みの構築（2019年度以降）。特に、②に関しては、白百合女子大学との連携事例も複数あり、現在も継続展開している（例えば、眞榮城・浅岡・目良，2017）。

せんがわ劇場×白百合女子大学：演劇アウトリーチ活動の展開

せんがわ劇場と白百合女子大学の連携に基づく演劇アウトリーチ活動の流れはTable 1 に示す通りである。劇場の企画運営システムの中に、他団体、外部有識者など、事業ごとに協働するプロジェクト実行チームを作ることで各事業の専門性と実効性を高め、客観的な検証を行うことで、事業の成果・評価の実施を目指している（末永，2017）。

Table 1 せんがわ劇場×白百合女子大学：演劇アウトリーチ活動の展開

■2016年9月 放課後等デイサービスでの演劇アウトリーチ活動に関する打合せ 連携最終目的：仙川の街全体で住民の“孤立化予防”活動を展開していく 短期的ヴィジョン：2016年度 現在の活動に関する同行視察 長期的ヴィジョン：2017年度以降 せんがわ劇場と大学・地域とで連携 生涯発達支援継続活動
■せんがわ劇場側の大学への希望
①児童養護施設等、卒業後の子どもたちの「地域の居場所作り」 白百合女子大学の授業時間外空きスペースを活用して月1回ペースで開催
②活動評価（活動に関する効果測定）
③演劇活動への相互支援（学生の出演⇄大学生の活動への演出依頼）
④アウトリーチ活動がもたらす多面的効果のエビデンス蓄積
■2017年度 全12回（最終回は仙川ふれあいの家にて発表会を実施）
■2018年度 全12回（最終回は白百合女子大学のホールを会場として発表会を実施）
■2019年度 全3回（新型コロナウイルス感染症拡大防止対策により中断）

2016年度から取り組んでいる放課後等デイサービスでの演劇アウトリーチ活動では、白百合女子大学の心理学系教員（発達心理学科教員1名・初等教育学科教員1名）とともに、「活動のアーカイブ化」を進めてきた。せんがわ劇場演劇アウトリーチグループ・白百合女子大学心理学系教員・放課後等デイサービススタッフの3者間でのミーティングを重ねる中で、演劇アウトリーチ活動における強みとして、参加者全員で共同して作品を創ることや、演技だけでなく、全員で作業する体験ができる点が示された。一方で、継続性のあるプログラムを組めそうではあるが、参加児童・生徒

の入れ替わりが多く、当日まで参加者がはっきりしないためにどのような活動目標を設定し、取り組んでいくことを目指すのがよいのかといった課題も挙げられた。また、これまでの演劇アウトリーチ活動については単年度での振り返りのみとなっており、経年におよぶ実践のふりかえりとその効果に関する検証を行っていない点も課題となっている。

そこで本論では、今後、さらに効果的な実践を継続していくために、これまでの実践を振り返り、その効果について多角的にまとめることを目的とした。また、先述の芸術活動におけるアウトリーチ7分類（財団法人地域創造, 2001）に新たな視点を提供するアウトリーチ活動の在り方について検討した。

方法

演劇アウトリーチ活動の実施時期

2016年9月から打合せを開始し、2017年4月から2020年2月まで、全27回実施した。うち2回は各年度の2月に保護者や関係者を招いた発表会を開催した。

参加者

せんがわ劇場演劇アウトリーチグループは毎回4名～5名が参加した。白百合女子大学の学生ボランティアは、発達心理学科・初等教育学科の有志（大学1年生～大学院博士前期課程2年生）が毎回1名～4名参加した。白百合女子大学からは学生ボランティアが所属している学科の教員が各1名（計2名）参加し、活動のサポートや活動内容の観察・記録役割を担った。

参加児童・生徒：放課後等デイサービス利用者は毎回10名前後が参加した。同一曜日（土曜日）での実施となったため、多少の人数変動はあるものの参加者構成はほぼ同一であった。年齢は6歳から18歳、性別比率は2：1（男児：女児）であった。

放課後等デイサービススタッフ:放課後等デイサービスのスタッフ（含：音楽療法師・造形専門スタッフ）は、施設長1名と活動時に勤務日となっているスタッフが各回平均5名参加した。

放課後等デイサービスでのアウトリーチ活動内容

せんがわ劇場演劇アウトリーチグループが他の実践先（市内小中学校・市内相談学級など）での経験を通して構築したプログラムに基づき、放課後等デイサービスにおいてTable2に示すベース・内容を中核として実践した。

Table2 放課後等デイサービスでのアウトリーチ活動内容

- 日時：毎月1回、土曜日。1回のプログラム所要時間は60分間（10時半～11時半）。
活動前：当日1時間半前からスタッフによる事前打ち合わせとリハーサル。
活動後：当日実施終了後に30分～1時間程度振り返り（参加児童・生徒の様子に関する確認・次回実施内容や留意点に関する確認）。
- 場所：事前・事後打ち合わせ場所－せんがわ劇場ミーティングスペース。
活動実施会場－放課後等デイサービス内のフラットなフロア。
- 活動内容の概要：毎回の活動はせんがわ劇場演劇アウトリーチグループリーダーが原案を作成。活動前のリハーサル時に最終調整を行った上で実践。
- 放課後等デイサービスでの演劇アウトリーチ活動実践概要（活動時間60分）
 - ①自己紹介（5分）
 - ②導 入（10分）（せんがわ劇場演劇アウトリーチグループ作の歌と踊り）
 - ③表現活動を目的とした体験1（10分）
 - ④表現活動を目的とした体験2（10分）
 - ⑤自由遊び（25分）



Figure1-1 活動風景 1



Figure1-2 活動風景 2（発表会準備）

先述の通り、各年度末には発表会を行った。特に2018年度にはこれまでの活動経験を踏まえ、活動の集大成として前回よりも少し規模を拡張した形式にて発表会を行った。発表会の開催趣旨は、「放課後等デイサービスにおいて実施しているせんがわ劇場演劇アウトリーチ事業の様子を、保護者・関係者に向けて公開する。」とし、放課後等デイサービスの土曜日クラスに通う、演劇プログラムへ参加希望を出した子ども達10～14名程度を対象として実施した。会場には、保護者、関係者を観客として迎えた。発表会の具体的なプログラムはTable3に示す通りであった。

Table3 放課後等デイサービスでのアウトリーチ活動2018年度発表会
(せんがわ劇場演劇アウトリーチグループリーダー作成資料を一部改訂して引用)

No.	所要時間(分)	活動内容	子ども達の動き
1	5分	始まりの挨拶	座って見る
2	10分	講師による挨拶と自己紹介 講師5人が自己紹介をする。 (名前+好きな飲み物)	座って見る
3	10分	お名前インタビュー インタビュアーが、マイクを持って子ども達一人一人の名前+好きな飲み物を質問をする。名前はホワイトボードに書き視覚化して(学生の方1人に手伝ってもらう)、全員でその子の名前を呼ぶ。	座って見る。 インタビューが来たら答える。
4	5分	わかばっこ体操	立って一緒に体操する。 ピアノに合わせてわかばっこ体操を行う。
5	20分	「不思議の国のアリス」の劇をやる 「不思議の国のアリス」の絵本を、4つの場面にまとめた短い参加型の劇を皆で行う。 (プロローグ、森の場面、お茶会、エピローグ)	座って見る&一緒に参加する
6	5分	メイキングビデオ鑑賞 これまでのWSの様子や、発表に向けての制作過程を映像で流す。	座って見る
7	5分	終わりの挨拶 せんがわ劇場講師による終わりの言葉。	座って見る



Figure2-1 2017年度発表会風景
(会場：仙川ふれあいの家)



Figure2-2 2018年度発表会風景
(会場：白百合女子大学 クララホール)

演劇アウトリーチ活動の効果測定に関わる調査内容および回答者

学生ボランティアスタッフへのアンケート：各年度の活動開始時と全体の活動終了後に地域連携活動に関する意識調査を行った。調査項目は、ボランティア活動継続動機測定尺度（妹尾・高木，2003）を使用した。この尺度は、①自己志向的動機（自分の持っている知識、技術を使う練習になる、自己を再発見し、成長させることができる、技術をつかう練習になる、自己を再発見し、成長させることができる、余暇が有効につかえる等からなる5項目）、②他者志向的動機（人に喜んでもらえる、人や社会の役に立てる、人はお互い助け合わねばならず、自分にもその義務がある等からなる6項目）、③活動志向的動機（活動を通じて積極的に社会参加できる、喜んだり楽しんだりできる、友人を得ることができる等からなる5項目）の計16項目、3因子から構成されている。回答方法は、非常にあてはまる：5～まったくあてはまらない：1までの5件法であった。得点化に際しては、下位因子毎に項目数で除し、5点満点として使用した。また、実施後のアンケートでは本活動に参加した感想・今後の本活動に期待することなどの記載を求めた（自由記述）。

せんがわ劇場演劇アウトリーチグループからのフィードバック：毎回の活動終了時や各年度末のミーティングにてアウトリーチメンバーからの振り返りコメントを得た（ミーティングに参加できなかったメンバーはメー

ル等で報告した)。

参加児童・生徒の様子に関する観察調査：継続的に参加している児童を中心に演劇ワークショップ参加中の言動を記録した。また、活動時の様子について把握することを目的とし、施設長の許可および施設利用児童の保護者の同意が得られている児童を中心に動画記録を行った。観察時の観点として、八束（2014）のコミュニケーション評価スケールを参考に、対象児童・生徒の年齢に併せた設定に改定して用いた。さらに、継続参加者の縦断的变化について検討するため、①活動時の様子、②好きな活動、③苦手な活動、④好きな音、⑤苦手な音、⑥放課後等デイサービススタッフからの情報（演劇アウトリーチ活動時以外の様子に関する情報）について記録した。

倫理的配慮：演劇アウトリーチ活動に関するアンケートへの回答を求める際、放課後等デイサービス施設長・利用児童の保護者・せんがわ劇場演劇アウトリーチグループ・学生ボランティアを対象に個人情報保護されることについて文書説明を行い、参加同意を得た上で実施した。

結果

参加児童・生徒の反応：継続参加をしていた児童・生徒を中心に、①活動時の様子、②好きな活動、③苦手な活動、④好きな音、⑤苦手な音、⑥放課後等デイサービススタッフからの情報（演劇アウトリーチ活動時以外の様子に関する情報）について記録した。記録に際しては録画データおよびその場での観察者役割を担った学生または大学教員が担当した。また、活動実施後に行われる振り返り場面にて各メンバーから報告された内容も記録にまとめた。記録の内容は次回の活動計画や年度末の発表会プログラムに反映させる形で活用した。オリジナルの歌や体操は、発話が難しい子どもたちにも浸透し、各自のスタイル（寝転がることが好きな子は寝転が

りながら)で参加している様子も見られた。

参加者児童・生徒の保護者の反応：通常プログラム実践時の反応として、放課後等デイサービススタッフに対して、「ダンスや歌が定着している。」「(放課後等デイサービスの)お迎えの車に乗るときに、歌を歌っている。」「今日はこの活動があると分かるみたいで、楽しみにしている。」との報告があった。

放課後等デイサービススタッフの反応：活動時に、「〇〇さんは人との距離が課題だから、この活動を通してお互いに気持ちのよい距離感を学んでもらえるとよいなと思っている。」「□□さんは、自分の話したいことをわーっと話してしまう傾向があるので、場に応じた言葉を選ぶなど、この活動が練習の場として活用出来ると思う。」などの具体的な提案を得ながら活動を展開していくことができた。

実践者側（初等教育学科・発達心理学科・発達心理学専攻大学院生）への効果：活動に継続的に参加し、実施前後での地域連携活動に関する意識アンケートに不備無く回答した計5名のデータについて分析（対応のある t 検定）した結果、実施前よりも実施後において、自己志向的動機・他者志向的動機・活動志向的動機すべての側面で活動後の得点が高くなっていたことが示された（自己志向性： $t(4)=7.48$, $p<.01$, 他者志向性： $t(4)=11.31$, $p<.001$, 活動志向性： $t(4)=3.31$, $p<.05$, Table4参照）。

Table4 地域連携活動に関する意識（活動参加前後での変化） 対応のある t 検定

	活動前		活動後		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
自己志向的動機	3.66	0.78	3.94	0.79	7.48**
他者志向的動機	3.54	0.36	4.34	0.26	11.31***
活動志向的動機	28	0.69	3.48	1.03	3.31*

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

学生ボランティアを対象とした活動実施後アンケートの自由記述欄記載には下記内容が感想・期待として挙げられた（Table5参照）。

Table5 学生ボランティアを対象とした活動実施後の感想

-
- 自分の勉強のために1回限りではなくある程度の期間継続して参加させていただけ場になりました。
 - どうしてもうかがえない日には2回程度お休みをしてしまったのですが、月に1回しかない活動なので、休んでしまうと子どもたちの成長に向かうちょっとした変化を見逃してしまったという感じがします。
 - 今後参加される学生は、是非、毎回出席をおすすめします。
 - せんがわ劇場演劇アウトリーチグループのみなさんが作成された歌は、子どもたちだけではなくスタッフのみなさんにとっても喜んでもらえるものになっていた印象がある。
 - 実施回によっては、トータルすると大人の人数の方が子どもたちの人数より多いこともあり、開始時には緊張した雰囲気を感じたが、活動が始まり、だんだんと慣れてくると緊張感もほぐれ、子どもたちの適応力を感じたこともあった。
 - 児童それぞれの活動目標を共有できていると、アウトリーチ実践時にボランティアとしてどのようにアプローチしたらよいかの参考になるのではないと思った。
 - 活動を通して、言葉にならなくても発信しようとする子の姿などを見ることがあり、活動の意義を感じた。
 - 活動の回が重ねられ、複数回参加している子どもにとっては、歌や体操がとても楽しく、大好きなコンテンツになっていることがわかった。
 - 毎回、事前の打ち合わせと事後の振り返りがあったので、次の回の課題が明確になり、自分自身の中でも「前回できなかったことが今回はできた」という達成感につながった。
 - 月に1回の活動なので、毎回、事前に施設側スタッフからの情報もあると、気を付けるべきことがよりはっきりして活動しやすくなるだろう。
 - せんがわ劇場の方たちが作成された歌やスイッチの装置など、工夫された仕掛け、子どもたちの注意集中を促す働きかけ方に感動した。
 - 参加回数が増えたと、子どもたちが前回のことを覚えてくれていてうれしかった。
-

せんがわ劇場演劇アウトリーチグループへの影響：せんがわ劇場演劇アウトリーチグループからは、活動振り返りの回の資料として下記の報告が挙げられた（Table6参照）。

Table6 センがわ劇場演劇アウトリーチグループからの感想

【月に1回の活動に関する振り返り】

- 参加する子どもたちも、実施する側の大人たちも、トータル的人数が多くなると注意が散漫になることもあったが、みんなで踊ったのは人数の多いことの良さ、エネルギーが高くなって良かった。
- 発話練習を希望しているお子さんなどへの働きかけを配慮していけるとよいなと感じた。
- 発話も歌を歌うことも難しい子に対しては、身体を動かすことを促すなど、それぞれの子どもたちができることに焦点をあてて活動を計画したい。
- 輪になって行う活動が苦手な子はその活動になると後ろの方に行ってしまう。それぞれの好きな事や苦手なことを尊重しながら活動を計画していきたい。
- 自由参加ではあるが、声のかけ方などを工夫したり、子どもたちが注目しやすくなる工夫は必要だろう。
- お名前インタビューはとても良い。学生さんにその場でホワイトボードにお名前を書いてもらって、みんなで呼ぶという方式を毎回やっていると、お互いに認識できるようになってきている気がする。
- 導入部分で子どもたちの気持ちをつかむ活動が入っているとその後も展開しやすい。

【発表会準備に向けた検討】

- 発表会は誰のためにやる会なのか、企画する側の意識共有が必要。保護者の方や関係者の方に普段のアウトリーチ活動（ワークショップの様子）を見てもらう機会ととらせることもできるだろう。
- 発表会を行う場合、子どもたちにはできるだけ早い段階から見通しをもって参加してもらえるように発表会について予告していくことが必要だろう。手遊びが発表会の作品の一つになる等、発表会を見据えた活動計画が求められる。

【発表会後の年度末振り返り】

- 年間を通して関わる中で、子ども達の得意なこと、好きなことに目を向けて活動に繋げることができていたと思う。
- 継続が力となることを他のどのアウトリーチの場よりも強く実感している貴重な現場であった。
- 継続参加率の高い児童の成長を感じることができた。そのことに実践者側も救われた。
- アウトリーチ活動のリーダーが参加児童の様子を見ながら工夫して構築したコンテンツの数々（活動開始時に毎回取り入れている「スイッチのうた」、放課後等デイサービスの四季を通じた活動を歌詞に盛り込んだ「わかばの春夏秋冬」、「わかばの手遊び歌」、「わかばっこ体操」、「ゆるい光」は大きな財産になったと思う。

- ・放課後等デイサービススタッフのみなさん、特に、音楽療法士の方、造形専門スタッフの方にも参加していただいたことにより、充実したコンテンツが完成した。
 - ・今回作成したコンテンツは活動先のためのものであるが、アウトリーチそのものにとってもこのようなコンテンツの構築が大きな意味を持つのだという発見があった。
-

考察

本論では、2017年度から2019年度に実施された放課後等デイサービスにおける演劇アウトリーチの実践を振り返り、その効果について多角的にまとめることを目的とした。

演劇アウトリーチ活動の効果について多角的にまとめるため、アウトリーチ活動の受け手となる参加児童・生徒への効果について検討するだけでなく、演劇アウトリーチ提供者側への効果、学生ボランティアへの効果、参加児童生徒の保護者への効果、放課後等デイサービススタッフへの効果について検討した。さらに、芸術活動におけるアウトリーチ7分類（財団法人地域創造，2001）に新たな視点を提供するアウトリーチ活動の在り方について考察した。

アウトリーチの活動先への効果に関しては、児童・生徒およびその保護者や施設スタッフの反応からおおむね肯定的な受け取りがなされており、月に1度のペースで実施し、その集大成として年度末に発表会を行うという形式での継続実践に繋がっていたことから、一定の効果が認められたものと考えられる。

次に、学生ボランティアへの効果について考察していく。学生ボランティアへの効果に関する分析結果からは、本活動に参加した学生のボランティア活動に対する自己志向的動機（自分の持っている知識、技術を使う練習になる、自己を再発見し、成長させることができる、技術をつかう練習になる、自己を再発見し、成長させることができる等）、他者志向的動機（人

に喜んでもらえる、人や社会の役に立てる等)、活動志向的動機(活動を通じて積極的に社会参加できる等)が参加前よりも高まっていることが示された。今回参加した学生たちは、将来教員になることを目指している初等教育学科の学生や、発達支援の職に就くことを目指している発達心理学科の学生たちであり、参加当初から意欲的に活動している様子が見られていたが、学内では体験することのない「演劇ワークショップ」を媒介とした児童・生徒理解に関わることにより、これまで以上に言語的・非言語的関わりの幅の広がりを実感していた様子も見られていた。

最後に、演劇アウトリーチ実践者への効果について考察する。年度末発表会後の振り返り時のコメントとして「今回作成したコンテンツは活動先のためのものであるが、アウトリーチそのものにとってもこのようなコンテンツの構築が大きな意味を持つのだという発見があった。」と述べられているように、アウトリーチを提供する側への肯定的な影響も示された。他のアウトリーチ活動においても、アウトリーチを提供する側への肯定的な効果は少なからず認められるものと思われるが、本活動のように継続的に実施し、異なる立場の関係者間で協議を重ねながら展開していくことによってのみ得られるシナジー効果(相乗効果)があるものと考えられる。

「シナジー効果型アウトリーチ」の提案

上述の通り、本論では、放課後等デイサービスにおける演劇アウトリーチの実践を振り返り、その効果について多角的に検討した。その結果を受け、すでに提唱されている芸術活動における7つのアウトリーチ分類(財団法人地域創造, 2001)に加え、新たな分類として、実践者と受け手との共同作業や相乗効果を想定した「シナジー効果型アウトリーチ」を提案できるのではないかと考えるに至った。

なお、「シナジー効果型アウトリーチ」として位置づけることが可能な

アウトリーチ活動に関しては、他の取り組み以上に「各事業の専門性と実効性を高め、客観的な検証を行うことで、事業の成果・評価の実施を目指す」（末永、2017）ことが不可欠であると捉えている。

今後の課題

演劇アウトリーチ活動の効果測定に関しては、せんがわ劇場と大学との連携に基づく活動展開において、当初から大学側に期待されている点であった。アウトリーチ実施者側との打ち合わせを通して、現在もよりよい効果測定方法について模索を続けている最中である。演劇アウトリーチ活動の前後を中心とした多角的視点に基づく情報集約は進んでいることから、例えば、参加児童・生徒への効果について、観察データを用いた詳細な分析（マイクロアナリシス）を進めていくことも求められよう。また、短期的な影響のみならず中長期的影響についても検討していきたい。

今後はさらに、短期的な実践とその効果に関する検討のみならず、中長期的なシナジー効果について明らかにしていくことをめざし、地域資源を俯瞰し、有機的な地域連携活動を可能にする“知の拠点”としての大学の機能についても検討を重ねていく必要があるものと考えている。

引用文献

Brooklyn Academy of Music: BAM, 2021 <https://www.bam.org/>(2021年9月14日).

厚生労働省 社会・援護局 2015 放課後等デイサービスガイドラインについて
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1365225.htm

眞榮城和美・浅岡靖央・目良秋子, 2017 教育プログラム推進と地域連携活動の在り方に関する検討—エデュテイメント大学活動を通して (1)—白百合女子大学研究紀要第53号, 93-112.

妹尾香織・高木修, 2003 援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果 社会心理学研究 (18), 106-118.

せんがわ劇場, 2021 調布市せんがわ劇場 <https://www.chofu-culture-community.org/>

sengawa-Theater (2021年9月10日)。

末永明彦, 2017 センがわ劇場エデュケーション事業の使命 センがわ劇場・白百合女子大学連携活動会議資料。

津上智実, 2013 神戸女学院大学のアウトリーチ教育と3大学連携―「コミュニケーションとしての音楽」再発見の試み 音楽教育実践ジャーナル10 (2), 29-51.

八束佳代, 2014 重度・重複障害のある子どものコミュニケーション能力の評価方法と発達段階に合わせた指導内容表の開発 島根大学大学院教育学研究科「現職短期1年コース」課題研究成果論集 (5), 61-72.

吉本光宏, 2003 アウトリーチ整理学「市民・地域との新たな回路づくりから芸術を中核とした社会サービスへ」『地域創造』14, 20-23.

吉本光宏, 2013 アウトリーチから始まる日本の未来―音楽教育にとどまらないインパクトとポテンシャル 音楽教育実践ジャーナル10 (2), 14-20.

財団法人地域創造, 2001 「アウトリーチ活動のすすめ」 地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究 <https://www.jafra.or.jp/library/report/12/index.html>

財団法人地域創造, 2010 文化・芸術による地域政策に関する調査研究 資料編③

謝辞

2016年より実施しているセンがわ劇場演劇アウトリーチ「放課後等デイサービス」関係者のみなさまにこの場をお借りして改めて心より御礼申し上げます。

阪井伸子先生をはじめとする実践当時の放課後等デイサービスわかば仙川店の皆様、旧センがわ劇場コーディネーター末永明彦さん（現：パルテノン多摩共同事業体 業務委託）、センがわ劇場演劇アウトリーチグループ 佐川大輔さん・柏木俊彦さん・山村茉莉乃さん・櫻井拓見さん・今井美佐穂さん・島村和秀さん、センがわ劇場制作担当の皆様、本活動に携わって下さった皆様、白百合女子大学学生ボランティアの皆様、白百合女子大学での発表会時、準備や当日開催に関わってくださった事務局長室の遠藤歩美さん、本当にお世話になりました。

今後の活動に関しましても、これまでの活動をベースとして新しい実践形態を模索し続けることができると希望しております。引き続きどうぞ

よろしくお願い申し上げます。

脚注1

せんがわ劇場アウトリーチ活動に関しては下記URLにて動画詳細紹介あり

<https://www.youtube.com/watch?v=NOM-mfZPMd4>

<https://www.youtube.com/watch?v=INNgM6IhJjs>

脚注2

放課後等デイサービスは、児童福祉法第6条の2の2第4項の規定に基づき、学校（幼稚園及び大学を除く。以下同じ。）に就学している障害児に、授業の終了後又は休業日に、生活能力の向上のために必要な訓練、社会との交流の促進その他の便宜を供与することとされている（厚生労働省，2015）。